

次の文章を読み、設問に答えなさい。

「今日の『銀河』は、久和くんが書いたものです。配ります」帰りの会で、湯上先生が声を張り上げる。前の方から順に、「やだあ」とか「わあ」とかしのび笑いがもれる。書きなぐられた文字と、ゲームのキャラクターのイラスト、『男子10人に聞きました！』という見出しの下に、好きなゲームソフトの名前がずらりと並ぶ。

浮いてしまう子、というのはどこにでもいて、それは『銀河』を書く時にはつきりとわかった。六年生になって、それまで担任の先生が書いていた学級だより『銀河』を私たちが書くようになった。一学期のうちは私の順番は回ってこないけど、九月になったら私も書かなきゃならない。①私はそれを、絶対に無理で、まじめな内容にしようと思った。事務的な連絡事項に徹して、絶対に悪目立ちする浮くものにだけはいない。

ふと、もしうみかだったら何を書くんだろうか、と考えた。

目立つことがあまりよくない『銀河』だけど、これまで一度だけ、文章がかがやいて見えたことがあった。学級委員の棚さんが書いた記事だった。

クラスのことから内容がはなれずに、だげどきちんと文章がおもしろい。家に持ち帰って机の上に置いておいたら、うみかがのぞきこんで読んでいた。「いいでしょ？」と声をかけると、うみかは落ち着きはらった声で「思ってたのとちがってた」と答えた。

『銀河』って書いてあったから、aカンソクの歴史とか、銀河の構造とか、そういうのが書いてあるのかと思った。

また、いつもの反論だ。自分の妹とも思えない考え方に、私はおこってしまった。

「あんた、宇宙人なんじゃないの」

「そうだよ。私たち地球人は、みんな宇宙人だもん」うみかが平然と答えて、私は絶句する。

その日、布団に入ってからもしライラは収まらなくて、うみかの顔を思い浮かべながら、私は、バカ、宇宙人と心の中で文句を言い続けた。

私たちはおたがいの買ったものを交換して読み合う。趣味が合わない時もあるけど、少なくとも、学研の雑誌

は、おたがいにだまって読む。

25 うみかの『科学』は、やはり『学習』に比べて漫画が少ない分うすくて、文章も説明文みたいになんか淡々としてる記事が多かった。あるいは、この勉強っぽいページも、うみかにとっては遊びに見えてるのかもしれない。だけど、私にはちがう。

「お姉ちゃん」

30 話しかけられて「ん？」と『5年の科学』から顔を上げると、うみかが「お願いがあるんだけど」と話しかけてきた。

「来月から、『6年の科学』を買ってくれない？」

「え」

35 うみかが「お願い」と頭を下げた。この子にこんなふうにされたことは、これまで一度もなかった。うみかが開いた『6年の学習』の裏表紙の見返しに、来月の『科学』と『学習』両方の予告が出ていた。見て、あつと

思う。『科学』の方に、『特集・宇宙はついにすぐそこに』の文字が見えた。

②「いやだよ」と、反射的に声が出た。

40 あんまりなんじゃないか。うみかがどれだけ宇宙のことを好きか知らないけど、だからってそのために私から楽しみをうばう権利なんかない。だいたい、普段あんなに生意気な態度を取ってるくせにこんな時だけ調子いい。「私だって、『学習』が楽しみなんだもん。いいじゃん、五年の読んでれば。来年になれば、いやでもあんた六年になるでしょ」

「今年じゃなきゃ、ダメだと思う。お願い、お姉ちゃん」

45 すぐに折れると思ったのに、食い下がったのがさらに生意気に思えた。私だって、『5年の学習』を読むのを我慢して、一度だってうみかにたのんだことなんかなかったのに。にらみつけると、うみかが思いがけず、必死な声で続けた。

「今年の『科学』は、特別な」

「どうして？」

「毛利さんが、九月に、宇宙に行くから」

50 私はあつけに取られた。うみかの目は真剣<sup>しんけん</sup>だった。「お願い」とまた、くり返す。  
「五年のよりくわしく、そのことがのるかもしれない。今年じゃなきゃ、ダメなの」

「……そんなに好きなの？」

毛利さんや宇宙への情熱のせいなのか、それとも私とケンカして興奮してるだけなのか、わからないけど、うみかの目が赤くなっていた。こくん、と無言でうなずいて顔をふせる。開きつばなしの来月号の予告ページに、ぼとつとなみだのつぶが落ちた。

55 ③二人してお母さんに『6年の科学』『6年の学習』、両方を買ってくれるようにたのみに行く。

お母さんは「ふうん」とうなずいた後で、うみかに「じゃあ、がんばらなきゃね」と告げた。

「うみか、逆上がりできるようになった？」

うみかの全身にぴりつと電気が通ったように見えた。痛いところつかれたっていう顔だ。

「うみかだけでなく居残りになったって、この間泣いてたでしょう？ みんなに笑われたって」

60 うみかは答えなかった。④私はおどろいていた。

この子がくやしがるとか、人の目を気にするところなんて想像できない。何かのまちがいなんじゃないかと思  
っていたら、お母さんが「好ききらいが多いからよ」とうみかに言い、さつさと台所にもどってしまう。  
結局、『6年の科学』の追加がオーケーになったのかどうかはわからないままだった。

65 鉄棒の**トックン**は、近所の『ちびっこ広場』で放課後にやることにした。私が一緒にやろうと言う前から、

うみかは毎日ここで練習していたらしい。

毛利さんが宇宙に行くのは九月。スペースシャトルエンデバーの名前をテレビでも少し前から紹介<sup>しょうかい</sup>してる。

「そんなに楽しみなの？」

「楽しみ」

70 別に意地悪で聞いたわけじゃなかったけど、うみかの返答は短かった。

鉄棒を両手でにぎり、えいっと空に向けてけり上げたうみかの足が、重力に負けたようにばたんと下に落ちる。

「足、持ってあげようか」

「いいよ。私、自分で回れるようになるから」

「私はいなくてもいいってこと？」

75 うみかの顔が、表情をなくした。おや、と思う間もなく、うみかが首をふる。

「ううん。いてほしい」

今度は私が表情をなくす番だった。そんなふうに素直<sup>すなお</sup>に言われたら、逆らえなかった。

「——見てれば、いいの？」

「うん。お願い」こくりとうなずいて、それから何度も何度も、空に向けて足をける。

80 「エンデバーってどういう意味か知ってる？」何度目かの失敗の後で、うみかが息を切らして言った。

私は「知らない」と首をふった。

「努力」とうみかが答えた。

85 空にうつすらと藍色<sup>あいいろ</sup>が降りてきて、うすい色の月が見え始めてしばらくしたころ、うみかがとうとう練習をや  
めた。妹が鉄棒をはなれたのと入れちがいに、今度は私が逆上がりをする。

足を上げる時、つま先の向こうに白い月が見えた。今日、うみかは何度も何度もこうやって、私と同じように、  
月をけつてたんだなあと思った。

逆上がりを成功させて、すっと地面に降りた私に向け、うみかが「いいなあ」とつぶやいた。

家に帰ると、もう七時を回っていて、私たちは、おじいちゃんとお母さんにしかられた。お父さんがまだ帰っ  
てきてなくて、よかった。

90 「明日も練習、一緒に来てくれる？」

うみかとひさしぶりにおふろに一緒に入った。鉄棒をつかみすぎたせいで感覚がおかしいのか、うみかが何度  
も手をグーとパーに動かしている。

⑤「いいよ」と私は答えた。だれかが何かできるようになる瞬間<sup>しゅんかん</sup>に立ち会うのがこんなに楽しいとは思わな  
かった。

95 翌日<sup>あす</sup>が、『りぼん』と『なかよし』の発売日だったことを、私はすっかり忘れていた。ミーナが「うち来るで  
しょ？」と聞く声にはつとした。毎月、発売日の放課後にミーナとコンビニに一冊ずつそれぞれ買いに行つて、  
どちらかの家で一緒に読むのが、いつの間にかルールみたいになっていた。

100 その二冊読みたさに私たちの仲間に入りたがっている子はほかにもいる。でも、ミーナは「はるかには親友だから」と、私だけをさそってくれる。

「行く！」漫画が読みたいのはもちろんだったけど、すぐに返事をしたのは別の理由からだ。た。「親友」のミーナのさそいを断ったら、ミーナは次から早苗ちゃんとか、だれか別の子をさそうようになってしまいかもしれない。もう、次から私を呼んでくれなくなるかもしれない。

105 うみかと鉄棒のことが頭をかすめたけど、練習はどうせ明日もあさってもするだろう。今日の放課後に付き合えなくなったことを伝えるため五年の教室によると、うみかはすでに帰ってしまった後だった。

⑥ どうしようか迷ったけど、すぐに、まあいいか、と考え直す。

110 ミーナの家を後にしたのは六時過ぎだった。『ちびっこ広場』に、もううみかはいないだろうと思ったけど、帰り道だから一応よった。広場を囲んだ灰色のフェンス越しに見える⑦鉄棒の付近に人がけはなくて、私はそれを確認したらほっとしたような、残念なような気持ちになった。

115 自転車をとめて家の中に入ると、「ただいま」を言う間もなく、おじいちゃんとおばあちゃんから「どこに行つた」と問いつめられた。圧倒されて、私はうまく答えられないで、ただ二人の顔を見つめ返す。

——うみかがけがをして、右うでを折って、病院にいくこと。お母さんは、そっちに行つて、うみかはひよつとしたらこのまま入院するかもしれないこと。

おばあちゃんたちが説明する声を、私はぼんやりと聞いた。うみかは、鉄棒から落ちたのだと言う。

120 私のせいだ。責められることを覚悟した。お母さんたちにも、きつとおこられる。

125 だけど、うみかは何も言わなかった。ぼんやりと天井を見て。お母さんに言われて、私はうみかのすぐそばにすわった。あやまらなきや、と思うけど、ここまで来ても、言葉は口から出てこなかった。

130 両親が二人とも、入院のことで先生と話すため病室を出て行ってしまう。私は下を向いて、沈黙の時間にただたえていた。

135 「九月までに、手、よくなるかな」うみかがぼつりと言った声に顔を上げる。うみかのくちびるが、かさかさにかわいて白くなっていた。「痛いなあ」とつぶやいて、顔をゆがめる。

「エンデバーの打ち上げ、家で、見たい」

140 「……見ようよ、一緒に」一緒に、を言う声がふるえた。

145 一緒に練習しよう、の約束を破った私が口にしていい言葉じゃないのかもしれない。だけどうみかがゆつくりと私を見た。その口元が、なぜか笑った。

「私ね、お姉ちゃん」

「うん」

「宇宙飛行士になりたいんだ」

150 どうして、この時を選んでうみかがそう言ったのかはわからなかった。だけど、大事な秘密を打ち明けるように、うみかが「ナイショだよ」と続ける。

155 「うん」私はうなずいた。そして、くちびるをかんだ。そうしてないとまたなみだが出てきそうだった。痛いのはうみかなのに、私が泣いちゃダメなのに。

160 ねたままで言ううみかがおびえていることに、声の途中で気づいた。人の目なんて気にしない、『科学』をおもしろがるセンスのある、風変わりで強い、私の妹が弱気になっている。

⑧ 「なれるよ」と私は答えた。鼻のおくがつんと痛んで、なみだがこらえきれなくなる。  
「なつてよ」もう一度、今度はそう言い直した。

165 一学期の終業式をむかえて夏休みに入っても、うみかは退院できなかった。私は五年のうみかのクラスからもらったおみまいの色紙と「早くよくなつてね」と書かれた紙がぶらさがった千羽鶴を預かって、病室を訪ねた。

「骨が曲がった方向でくつついちゃってるから、手術しなきゃならないかもしれない」

170 うみかの口調は、いつもみたいに淡々としていた。私は「え」とつぶやいて、とつさにうみかのうでを見てしまう。それからあわてて目をそらした。

「手術、するんだ？」

「うん。たぶん」

175 うみかが、クラスメートからもらった色紙のメッセージを目で読んでいる。一度ずつ読んだら、それでおしまいとばかりに、さつさとたなにしまう。蛍光ペンを駆使して、かわいい絵を入れてうみかにメッセージをつづつてる子たちとうみかが本当はそんなに仲良くないことを、私も知っていた。

200 して画面を見つめていた。録画した映像を何度も何度も再生して、毎日のニュースでエンデバーのことが報道されるたび、熱心に見入る。ギブスをしていない方の左手が、ぎゅっと、こぶしをにぎって、ふるえるのが見えた。

あ、泣くのかな、と思つて顔を見ると、うみかの表情が、これまで見たこともないくらいうれしそうにかがやいていた。人間は、別に笑顔じゃなくてもこんなふううれしさを表現できるんだつて初めて知つて、私にも、妹の喜びと興奮がそのまま伝染してしまふ。なぜか、私が泣きそうになつた。

205 お母さんが許可してくれた『6年の科学』を、うみかは自分の『5年』のと合わせて熟読して、私にも『科学』やほかの本、新聞で知つたというたくさんの方の事を教えてくれた。

机の前で、私は深呼吸して、方眼紙に『銀河』の見出しと、最初の一行を書き始める。

『現在宇宙に行つてスベスベ「エンデバー」は、「努力」という意味です。』

210 学校に關係ないことを書くのは、浮く人間の仲間入りかもしれない。だけど、私たちには教室の「ここ」がすべてじゃなくてもいいんじゃないだろうか。教室の机の前にすわつても、それと並行して気持ちもずっと遠い宇宙を向いてることだつてある。

ただ文章を書いてるだけなのに、途中、何度も息が切れた。自分がすぐはずかしいことをしようとしてるんじゃないか、あるいは、まじめな子に見えることをしてるんじゃないか、それをみんなに見せようとしてるんじゃないかと考えたなら、不安がおなかの底からのどまでを、わっと満ちた。

215 でも、私は、これをうみかに読んでほしい。あの子に教えてもらったことが、刷られてみんなに配られて、学校に認められるものになつたんだつてことを、見せたかつた。

清書用のペンを持ち直す。用意したdシユウセイエキは、ほとんど使わずに済んだ。一気に書き上げる。文章を書くのが楽しいなんて、初めて感じた。

完成した『銀河』の原稿を、両手でつかむ。見出しを見つめ直す。

『毛利衛さん、宇宙へ』

220 『無事にミッションを終えて帰つてきてくれることをいのつています。』と書いた⑫最後の言葉は、書いた後からほおがかーつとなるくらいで、かつこつけすぎたかもしれないと反省したけど、結局、そのまま残した。それはたぶん、うみかと、そして私の今の一番の気持ちだつたから。

(辻村深月『家族シアター』より)

〈語注〉※① 学研の雑誌：『科学』や『学習』などの、小学生向けの月刊学習雑誌

※② 毛利さん：宇宙飛行士「毛利衛さん」のこと

※③ 『りぼん』と『なかよし』：月刊少女漫画雑誌の名前

※④ ミーナ：「私（はるか）」のクラスメート（美菜）の呼び名

※⑤ ボルト：ここでは、折れた骨を固定するための金具のこと

※⑥ ミッション：ここでは、任務のこと

150 「もし、骨折で、手術して、うでにボルト※⑤を入れたりすると、それがたとえ一個でも、もうそれだけで宇宙飛行士にはなれないんだって」

「え」二度目の「え」は、大きな声になった。うみかが目をふせ、何でも無いふう窓の外を見る。だけど、私にはわかる。わざとだ。無理やり平気そうにしてる。うみかはいつも、しつかり私の目を見て話す。

155 私の小六の夏休みは、ほぼ、うみかのけがの思い出でうまった。うみか自身が感じてるように、あの子のけがは私が思っていたよりずっと重傷だった。両親が私がねた後で、いつまでもリビングで話してる声が聞こえて、私はそつと布団を出て、ドアに耳をくっつけて、声の内容を聞いていた。

——ひじのところから切つて、シンケイを一つ一つくっつけ直す——という声を聞いた日、私は全身の血が一度に下がっていくのをはつきり感じた。聞いてしまったことを後悔しながら布団に入ると、背筋が熱を出した時のようにぞくぞくした。

160 うみかが、手術する。つながっている自分のうでの付け根を見ながら、皮膚にメスが入ることを想像して、いやだ、とさけびそうになった。ダメだ、ダメだ、ダメだ、うみかのうでを切るなんてダメだ。宇宙飛行士が目指せなくなるなんて、ダメだ！

ねむれずにまた布団を出ると、二段ベッドの上から、うみかの机が見えた。並んだ『科学』のふろくたち。中に、ドーム型プラネタリウムの丸い頭が見えたら、⑨気持ちがおさえられなくなった。

165 南向きのカーテンの向こうから、月と星の明かりが差しこんで、部屋の中は窓辺だけが明るかった。ベッドを降りて窓を開くと、夜のせみが鳴いていた。晴れた空に浮かぶ星の名前。学校で習ったけど、私は北極星と、北斗七星くらいしかわからない。

170 宇宙飛行士になるには、勉強ができることはもちろん、身体が丈夫なことだって必要だろう。どうしよう。あの子は本気だ。あんなふうにはずかしそうに夢を打ち明けるくらい、大事に思ってる。エンデバーの打ち上げを、楽しみにしてる。

私は、あの子のために何ができるだろう。うみかに話を聞いてから、図書館でかたっぱしから宇宙飛行士に関する本を探して読んだ。手術したらダメなのか、目指すにはどんなことが必要なのか——、字がずらつと並んだ大人向けの分厚い本も開いてみた。

175 けがは私のせいだ。どうしよう、どうしよう、と一生懸命内容を讀んだけど、私にちゃんとした答えをくれる本は一冊もなかった。両親や先生に聞くことも考えたけど、宇宙飛行士の夢のことはナイショにするつて、うみかと約束していた。

病院で聞いたうみかの言葉を思い出す。

——宇宙に行ってるしかない。

痛みにはげ場がない、と話していた。何をしてても、気がまぎれないつて。

——想像するの。自分が宇宙にいること。

そう笑つてた。

⑩ああ。わかつたよ、うみか、と心の中で呼びかける。

185 月がとても近い。私が見てるこの空の向こうにあるものを、うみかだったらもつとたくさん想像できるんだろう。あの子になら、見えるのだろう。うみかはたぶん、宇宙にいるのだ。

いやなことがあった時、いつも大好きな宇宙のことを思い出して、きつとたえている。だから平気なんだ。クラスでひとりぼっちの時も、逆上がりで残された時も。つらくなかったわけがない。だからきつと、自分の居場所を別に作つた。せまい教室や目に見える場所だけをすべてにしなかった。だから、あんなに強いのだ。彼方かなたにある星々の明かりを見上げながら、⑪私は自分に何ができるかを、必死に必死に、考え続けた。

190 学級だよりの清書用方眼紙を前に、「何でも好きに書いていいですか」とたずねると、湯上先生は「へ？」と声を上げた。私が笑わず、じっと見てるのに気づいて、表情を改める。そして、「いいよ」と答えてくれた。

「一学期からみんなそうしてるじゃないか。自分の興味があることを書きなさい」  
「わかりました」ミーナと一緒に職員室を後にする。

195

うみかの入院は結局、夏休みいっぱいだった。

190 だけど、エンデバーの打ち上げにはどうにか間に合つて、私たちはうちのテレビで中継映像を見た。毛利さんはこれから一週間ぐらい宇宙にいることになるそうだ。

だれより興奮しているだろうに、うみかはシャトル打ち上げの間、ほとんどしゃべらず、ただ食い入るように

【設問】 解答はすべて、解答らんにおさまるように書きなさい。句読点なども一字分とします。

一 ―― 線 a 「カソク」(15行目)、b 「トクン」(65行目)、c 「シンケイ」(157行目)、d 「シェウセイエキ」(217行目)のカタカナを、漢字で書きなさい。

二 ―― 線② 「『いやだよ』と、反射的に声が出た」(37行目)とありますが、「反射的に声が出た」のは、うみかのことをどのように思っていたからですか。10～21行目をよく読んで説明しなさい。

三 ―― 線③ 「二人してお母さんにくたのみに行く」(55行目)とありますが、うみかの「お願い」をいやがつていた「私」が、協力することにしたのはなぜですか。説明しなさい。

四 ―― 線④ 「私はおどろいていた」(60行目)とありますが、なぜですか。説明しなさい。

五 ―― 線⑤ 「『いいよ』と思わなかった」(93～94行目)とありますが、このときの「私」の気持ちはどのようなものですか。その説明としてふさわしいものを次のア～エの中から一つ選んで記号で答えなさい。

ア うみかが「エンデバー」の意味のとおり、苦手な逆上がりができるようになるための努力を一生懸命している、生意気だった妹が急に成長していることを姉としてうれしく感じている。

イ うみかがなかなか逆上がりができず、それができる「私」のことをうらやんだり、練習をみてほしいとたよったりするので、教えることはこんなに心が浮き立つことなのかと感じている。

ウ うみかの思いを受け止めて逆上がりの練習を見守ることで、妹から素直にたよられるうれしさや人の役に立つ喜びを覚え、今まで気付かなかった自分の一面を見つけたように感じている。

エ うみかとは今まで仲が良くなかったが、たのみに応えて逆上がりの練習を手伝ったり、一緒におふろに入ったりすることで、自分たちはやはり姉妹の強いきずなで結ばれているのだと感じている。

六 ―― 線⑥ 「どうしようか迷ったけど考え直す」(106行目)とありますが、うみかとの約束よりもミーナからのさそいを選んだのはなぜですか。説明しなさい。

七 ―― 線⑦ 「鉄棒の付近に、気持ちになった」(108～109行目)とありますが、このときの「私」の気持ちを説明しなさい。

八 ―― 線⑧ 「『なれるよ』と言いつつ直した」(136～137行目)とありますが、「私」が「言いつつ直した」のはなぜですか。その理由としてふさわしいものを次のア～エの中から一つ選んで記号で答えなさい。

ア 宇宙飛行士になる夢をいただき、そのために努力をしていたが、けがをして弱気になっている妹の姿を見て、

そのけがに同情し責任を感じながらも、ただはげますことしかできないと思ったから。

イ 宇宙飛行士になる夢を初めて打ち明けてくれたが、けがをして今までになく弱気になっている妹の姿を見て、やさしくなぐさめの言葉をかけることで、不安を取り除いてあげたいと思ったから。

ウ 宇宙飛行士になる夢を自分だけに話してくれたが、けがをして弱気になっている妹の姿を初めて見て、その夢をかなえることは、妹にとっても自分にとっても大切なことだと思ったから。

エ 宇宙飛行士になる夢のためにあえて強気な態度をとっていたが、けがをして今までになく弱気になっている妹の姿を見て、わざと命令口調で言うことで、妹を奮い立たせたいと思ったから。

九 ―― 線⑨ 「気持ちがおさえられなくなった」(164行目)とありますが、どのような気持ちをおさえられなくなったのですか。説明しなさい。

十 ―― 線⑩ 「ああ。わかったよ」呼びかける」(182行目)とありますが、うみかについてどのようなことがわかったのですか。説明しなさい。

十一 ―― 線⑪ 「私はそれを決めていた」(6～7行目)、―― 線⑫ 「私は自分にく考え続けた」(188行目)、―― 線⑬ 「最後の言葉はくそのまま残した」(221～222行目)とありますが、

(1) 「私」が、『銀河』に書く文章を「無難で、まじめな内容にしよう」と決めていたのはなぜですか。説明しなさい。

(2) 「私」が、「自分に何ができるかを、必死に必死に、考え続けた」結果、『銀河』に宇宙についての文章を書いたのはなぜですか。説明しなさい。

〈問題はここで終わりです〉

( 2 0 1 6 年 度 )

九            八            七            六            五            四            三            二            一

|   |
|---|
| a |
|   |
| b |
|   |
| c |
|   |
| d |
|   |
|   |

$$\begin{array}{c} + \\ - \\ 1 \end{array}$$
The image shows three identical, empty handwriting practice lines. Each line is a horizontal rectangle divided into three vertical sections by dashed lines. The leftmost section is the widest, the middle section is the narrowest, and the rightmost section is the widest. The lines are intended for practicing letter formation and alignment.

|       |  |
|-------|--|
| (合 計) |  |
|-------|--|

(整理番号)